巻　頭　言

「価値の創造」

人類の歴史にCOVID-19が出現して３年が経った。世界中が巻き込まれたこの感染症が人々の健康と財産に与えた損失は計り知れない。戦争であれば戦勝国は敗戦国に課す賠償金により戦費をあがなうこともできるが，中国は武漢から広がったSARS―CoV2の起源は結局曖昧なままで，トランプ前米国大統領が主張するような賠償金を中国が負担することは考えられない。当院もまた，職員の健康被害はもとより，COVID-19以外の通常診療は大きく制限され，多くの努力と工夫，忍耐を経てここまで来た。いうまでもなく生命の危機に瀕するのはCOVID-19だけでない。心筋梗塞，脳卒中を初めとする一刻を争う救急医療，緊急ではないにしても日々生命の危機が進行する悪性腫瘍，救急でも生命を脅かす状態でもないが何年も前から仕事や家庭の調整をして治療を予定していた様々な疾患もまた，中断することのできない医療の対象である。これらの患者への対応を，コロナ対応とどう切り分けるかということでは，私たちは何度も議論を重ねてきた。当然といえば当然かもしれないが，このような状況の中でのCOVID-19対応のための休床補償とCOVID-19診療への特別な加算は，病院経営の面で大変ありがたい処置であった。もともと病床に余裕のあった病院は，これを機に大きく経営が潤ったところが多いのに対し，当院は本来他の疾患，それも収益性の高い診療をしていた病院資源をCOVID-19診療に振り当てたため，補償は額面通り負に対する補填であって，かろうじて収支バランスがマイナスにならない程度のことにしかなっていない。しかし，そのコロナ補償はどこからか湧き出てきたものではなく，多くは国債という将来からの借金による国の予算に他ならない。当然ながらコロナ以外の予算は大きくその皺寄せを受ける。今後，医療費の抑制はますます厳しいものになっていくであろう。医療費の増大は，これまで社会からは常に批判的に受け取られてきたと思う。では我々は，パンデミックという災害に対し，必要とはいえ結局多額の補助金のもとに大きな消費行動を行ってきたのであろうか。もしそうであれば，我々の仕事は良く言って負債をゼロに近づけるものであって，どこまでもその活動を抑えられるべき負の活動ということになる。昨秋，全国公立病院連盟総会で聴いた福島はいわきFC代表取締役の大倉　智氏の講演は，その様な疑問を氷解させるごとき勇気と創造に満ちた内容であった。人はサッカーを見なくても生きていくことができるし，スポーツをしたからといって物が生まれる訳でもないが，すばらしい試合を見，スポーツを学ぶことで，人々の価値は高まる。そして社会が活性化され，社会の価値と資産も高まる。医療もプロスポーツも，基本的に直接ものは作らずサービスを提供する仕事である。我々は，様々に訓練された技能を持ち，人々に医療というサービスを提供する。そのサービスは，すなわち社会の価値そのものであり，本質的に物作りと変わらない。ともすれば，経営収支が評価の対象となりがちな医療ではあるが，COVID-19という未曾有の災害への対応を通し，目の前の人々への日々の対応という価値の創造ともに，より長く，大きな視点で病院の価値を高める一人一人でありたい。

病院長　秀　道広